

## 書 評

### 金澤周作著『チャリティとイギリス近代』

(京都大学学術出版会、2008年)

坂本 優一郎

本書は、一国の近代におけるフィランソロピ（チャリティ）の全体像を提示するという野心的な試みである。フィランソロピは「民間非営利の自発的な弱者救済行為」であるがゆえに、当時の国家でさえ あるいは当時の国家だからともいえようか 全体像を完全に把握することは不可能だった。とうぜん、「これを何年かけてでも調べれば、きっと全容がわかる」と確信できる包括的な史料が残されているわけでもない。それにもかかわらず、「近代英国を特徴づける独自の相対的に自立した一領域」としてチャリティを描くという。この困難な課題を、一外国人研究者がやってみせようというのだ。

著者金澤周作は、篤志協会に関心が集中してきた研究史を丹念にふまえ、ターゲットをフィランソロピという「構造」の解明にすえる。フィランソロピの類型化、効果、受け手にとってのチャリティの意味を主要な論点として提起し、議会文書、制定法、書籍、各種小冊子、説教、新聞や雑誌記事、篤志協会報告書、個人書簡といった多彩な史料を組み合わせ、ひとつの構造のなかに諸論点を有機的に結合させる。あるいは、硬直しがちな類型化の弊を、こうした史料群からえた豊かな具体例の描写によって回避する。このようにして、既存の「大きな物語」に回収されるのではなく、多様性や個別特殊性の強調でもなく、また福祉国家への発展史のひとつコマとしてでもない歴史像、すなわち近代英国が近代英国であった必須の要件として、フィランソロピの「構造」を描ききってみせた本書は、著者の学問的勇気とそれを可能にした力量の結晶である。

内容を簡潔に整理していこう。本書は三章構成になっている。まず、フィランソロピを類型化して「構造」の大枠を定める（第一章）。そのうえで救貧

法、海難救助、帝国という三つの具体的な局面で、チャリティと「国家」との関係定位する（第二章）。さらに与え手と受け手の関係を階級、ジェンダー、ネイションに探り、視点を生活史から心性やイデオロギーを経由して言説空間にまで広げる。こうしてフィランソロピという構造体と、主体たる人間、あるいは「社会」との関係を描き出す（第三章）。著者のことばでいえば、「構造」を定位してから、それに続けて具体的実践へと議論がすすめられていく（14頁）のだ。

第一章では、フィランソロピが五つのタイプに類型化される。基金を設定された遺産を原資とする遺言にもとづく「慈善信託」。寄付金収入を原資とする寄付者の総意にもとづく「篤志協会」。組合員の相互扶助による「友愛組合」。文字どおり慣習としておこなわれる「慣習型慈善」。個々人による「個人型慈善」。1750年代にこれらの五つの類型が出そろい、フィランソロピという自立領域が成立する。また、とくに「慈善信託」と「篤志協会」の両者について、フィランソロピの金銭的規模が同定される。

18世紀から19世紀にかけての英国国家は、民間にたいして一貫して制限的、選択的にしか干渉しない国家であったと、著者はいう。第二章では、近代英国国家とフィランソロピの関係をつうじて、レッセ＝フェールを可能にした民間側の条件が問われる。推計にもとづき、フィランソロピの金額規模が公的救貧のそれを凌駕していたことや、フィランソロピが公的救貧の前段階に位置し、ときに公的救貧にさえ侵食する強力なセーフティ・ネットとして機能していたことが示される。こうした民間の自発性を基盤とする福祉のありかたこそ、国家干渉を最小限に抑制できた要因であった。また著者は、海難対策の展開にも可能なかぎり国家の干渉を排除しようとする民間の活力を見いだす。フィランソロピが国家に関連しつつも明確に自立していたことは、帝国でフィランソロピが国家の属性と化していく実態がしめされることによって、対比的に強調される。

第三章では、フィランソロピという自立性が強い領域のなかで、主体たる人びと 与え手と受け手 がどのようにふるまっていたのか、また、心性にどのような影響を与えていたのかについて論じられる。王族をはじめとする多様な主体とフィランソロピとの関係をつうじて、すべての主体を拘束する時空間としての、それであるがゆえにイギリス人としてのアイデンティ

ティを提供したフィランソロピ像が示される。そうしたフィランソロピは、年中行事としての人びとの「生活史のなかに組み込まれていた」（243頁）のだ。同時にそれは、ときに「悲惨」を分節化しつつ、受け手側に受け取る権利意識を、与え手側に与える義務意識を、「英国人/イギリス人」には国民意識をはぐくむことで、「救う共同体」を現実のものとして承認させる効果をもたらした（253頁）。つぎつぎと救済の対象を創出し、実践において包括性に富むフィランソロピは、それにかんする思考様式や言説をつねに構造に内部化し回収する力を有していた。その結果、内部で多様化・分類化された言説によって、フィランソロピという構造そのものが覆されることはありえなくなったのだ。最後に、本書の白眉ともいべき第四節で、「投票チャリティ」批判分析をつうじて、1870年代というイギリス社会の大転換期においてすら、融通無碍で強靱なフィランソロピ構造が持続力をもっていたことが示されるのである。

結論は著者に語ってもらおう。「フィランソロピは近代においてひとつの自立領域を構成し、具体的な諸実践による多彩な弱者救済のみならず、都市化・工業化に伴う混乱への対応や主体およびナショナル・アイデンティティ形成にも積極的に関与した。英国の近代を考える際、地域・国・帝国・世界いずれのレヴェルにおいても、かくも人々の生活と心性に浸透していたフィランソロピを無視することは到底できない」（323頁）。

主張の大胆さと対照的に、本書はバランス感覚に富む叙述となっている。対象においては、与え手と受け手、男性と女性、最下層を含むワーキングクラス・ミドルクラス・王族も含むアッパークラス。空間においては、社会・国家・帝国。手法においては、生活史、下からの社会史、ジェンダー論、国家論、言説分析。さらには構造と認識、そしてアイデンティティ。つまり、ここ30年あまりの社会史の成果や手法、方法論のほとんどすべてが、本書に盛り込まれているのだ。それに加えて、丹念な研究史の整理と適切な問題設定、基本的な用語や概念への丁寧な検討と慎重な運用、多彩な史料の精力的な発掘と効果的な利用（とくに、ブレイク・スルーをもたらした『チャリティ便覧』の発掘とその処理は鮮やか。多様なフィランソロピのありかたを、具体例をつうじて受け手の立場から関連付けていく箇所（219-225頁）は見事）。いずれをとっても本書が第一級の研究成果であり、近年のイギリス史研

究の最重要文献であることには間違いない。

もっとも大きな特徴は、「構造主義」的な構造主義そのものではない思考と叙述にある。フィランソロピという全体の構造なくして、「慈善信託」や「篤志協会」などの部分はいずれも、それひとつのみをとりだしても意味をなさない。また、各主体の行動様式や位置取りはあくまで構造に規定され、それは思考様式や認識様式、イデオロギーまでにもおよぶ。これは「関心は、(中略)短期持続的ないし事件史的な事象の背景をなす『(緩慢にしか)動かない歴史』のほうにある」(15頁)と筆者が言うように、フィランソロピの全体像をえるために選択的に採用されたアプローチである。

ただ、それゆえの疑問も出てくると思われる。それは時間である。著者はフィランソロピ構造を随所で「時空間」と表現し、その「動的な『構造』を描く」(15頁)とするが、描かれているのは構造の機能がもつダイナミズムであって、構造そのものの「動態」ではない。それを描くためには、時代設定の両端のあつかいが問題となる。つまり、構造の生成過程と「変容」過程である。その意味で、終章で示唆されているが、1870年代以降の福祉国家生成のダイナミズムに、ぜひとも一章を割いて詳論してほしかった。また、フィランソロピが静態的な構造として描かれているがゆえに、この構造内には時間はほとんど流れていない、あるいはきわめて緩慢にしか流れていない。これもまた本書の時代設定の問題とかかわってくる。すなわち、最近のイギリス史では、当該時期を「長い18世紀」として理解する見方が有力である。論者よって多少異なるが、およそ17世紀末から19世紀初頭がひとつのまとまった時代として理解される。財政軍事国家からレッス＝フェール国家への転換も、まさにそのような時代区分にそくした理解である。それにたいして本書では、「長い18世紀」論以前に支配的であった経済史の古典的な時代区分とおなじ1750年から1870年代までを対象として設定している(これは、構造としてのフィランソロピが、じつは市場経済とひじょうに親和的であったからではないかと筆者は考えるが、いかがであろうか)。いずれにせよ、構造の外部に流れる時間と構造の内部に流れる時間との交錯は、どのように理解されるのであろうか。また蛇足だが、あまりに構造に拘束された「主体」像も気になった。著者のいう「近代人」(324頁)とは、このように構造に規定された人間像なのであろうか。構造の変容と「主体」の関係は、どのように

理解すればいいのだろうか。

以上、外在的な疑問を提出したが、専門外の評者による浅薄な理解、もしくは誤読・誤解にもとづくものであろう。ご海容を請う。さて、貧困の問題は遠い過去の異国の問題ではない。眼の前にある問題である。日本のいわゆる「三層のセーフティ・ネット」という制度から、フィランソロピがすっかり抜け落ちていることに気づいた本書の読者は多いであろう。教育もフィランソロピの一種であると理解できれば、格差社会と学校教育との問題についても、あらたな視野が開けるであろう。近代英国の公的な制度の多くは、諸外国の近代化の過程で移植されていく。では、フィランソロピはどうだったのか。本書で描かれているのは、そういう意味で遠い異国の歴史だけではない。われわれの問題でもあるのだ。本書は掛け値なしの好著である。さまざまな分野の大勢の方々に、一読をお勧めしたい。